

縄文の共生・共助

園長 児嶋 草次郎

新しい年を迎え、気持ちを引き締め直していたら、いつの間にか時がすぎ去り、もう2月に入っています。齢を取るほど、時が早く過ぎ去っていくように感じます。

今年は、梅の花が開くのが遅く、初めて梅の花を見たのは1月24日でした。方舟館南側の梅の木が5輪ほど咲いているのを発見し安堵しました。例年に比べると、1か月近く遅いことになります。秋がいつまでも温かかったので、蕾を作るのが遅れたのでしょうか。一方日本スイセンは、今年は多くの花を暮れから咲かせ、馥郁（ふくいく）たる香りを楽しませてもらっています。しかし、1月25日にやって来た大寒波（26日朝は-9℃）で、茎が萎（な）えてしまい、残念ながらほとんどの花が首を垂れてしまいました。

さて、今月は、1月30日（月）の石井十次記念式の理事長としての挨拶と、その後のある支援者との会話を掲載させていただきます。記念式は、日本基督教団高鍋教会の牧師松井初先生の司式によって厳粛に取り行われました。私は魂をゆだねるような気持ちで讃美歌を歌いましたが、心のどこかにぽっかりと穴があいているような気分もありました。その支援者の方がそこを突いてくださいました。

第109回石井十次記念式に御出席くださりまして、ありがとうございます。理事長として一言御挨拶申し上げます。

令和4年度もあと2か月となっております。この約1年を振り返りますと、この地球も人間もかなり病んで来たというのが実感です。コロナは世界の隅々まで感染が繰返し広がり、この3年間では世界で約6億9000万人の人が感染し、約680万人の方が亡くなったそうです。ついでに日本では、約3200万人の人が感染し、約6万7000人の方が亡くなっています。石井記念友愛社の各施設においても、この1年ほどの間に次々にウイルスが侵入し、職員も子供たちも苦しめられました。命を奪われるケースがなかったのは、せめてもの幸いでした。

気候変動から来る災害も、各地でおきるようになって来ています。地球温暖化がその要因となっているというのが専門家たちの見方です。地震による災害も常に念頭におかねばならない状況です。各種の災害に遭遇された方々にはお見舞申し上げるしかないのですが、石井記念友愛社の各施設においては、利用者に対し安心・安全を維持できたことは、これも幸いなことでした。この大自然を畏れつつも、感謝したいと思います。

どう考えても理不尽なのは、ロシアのウクライナ侵略です。地球は一つという理念のもとにグローバル化は進んでいると夢想しているところに、突然起きた一方的な戦争でした。もう1年になろうとしています。日々多くの命が奪われており、一日でも早く戦争を止めてほしいと、強く願っております。

この戦争によって、燃料や穀物等の多くの輸出入がストップし、世界的な大混乱をもたらしています。

す。物価の値上がりもまねいており、特に貧困層の人々の生活をさらに追い込んでおります。この戦争については、このアジアに飛び火する可能性もあり、予断を許しません。

この戦争について書かれたものをアレコレ読んでいますと、アメリカ、ヨーロッパ流のグローバリゼーションの価値観に問題があると指摘する専門家もおられます。民主主義は大事ですが、その背後にあるその国々の歴史や文化を互いにもっと受容し合わねばならないのであろうと思います。

先ほども言いましたように、このように地球も人間も、病んだような地球環境の中で、日本がこれから、どう世界の中で生きていくのかを考えなければなりませんし、私たちは、社会福祉法人として、福祉世界の中でどう日本に貢献していくのかを考えなければなりません。

ところで来年は、石井十次没後 110 年、児嶋虜一郎生誕 110 年という節目を迎えます。それに向けて来年度は、高鍋の石井記念明倫保育園の改築、事業としては、共生施設「友愛の森」建設と、都市内の母子生活支援施設「みどりホーム」の建設を行います。「友愛の森」は、保育園と小規模児童養護施設と障がい者通所施設との複合施設です。石井記念友愛社は、その「友愛」の具現化のために、28 年前より取り組んでまいりました。保育園と老人デイとの共生施設がスタートです。そして、16 年前（平成 18 年）からは、石井記念にしん保育園、じゅうじデイ、小規模児童施設の複合・共生を実践して来ています。「友愛の森」は、その実践を、地域社会作りに生かそうとする試みとなります。石井記念友愛社の到達目標「友愛の地域社会づくり」への挑戦ということになります。

一方の母子生活支援施設は、今後、最も重要なセーフティーネットとなり得る施設です。私は子供の貧困は、女性が妊娠した時から始まるという考えを最近持ち始めています。スマホやインターネットの普及により性情報が氾濫する世の中となって来ています。まだ精神的に未熟な年令の時から、性情報に日常的に触れるようになり、性道徳が崩壊して来ているのです。予期しないあるいは望まれない妊娠が今後増えていくことは十分に予想されることです。しっかり相談体制、受け入れ体制を作っておかないと、母子心中や子殺しが発生します。本来、母性が妊娠するということは、その家族にとって、最も喜ばれ感謝されるべき慶事です。そのことを隠し、また生まれてきた子を捨てるという行為ほど母子にとって不幸なことはありません。産前産後ケアの拠点となるべき施設が母子生活支援施設です。現在、宮崎県内にはこの施設は存在しておらず、しっかり世の中のニーズに答えていきたいと思えます。

地域と家族も病んだような状況の中で、私たちは、「友愛」の精神を地域社会の中に取りもどすべく努力していかねばなりません。最近私は、遠い遠い縄文時代の人々のような、大自然との共生と人々の助け合い（共助）の地域社会づくりをイメージしています。

石井記念友愛社の使命を今後も果たしていくことを、石井十次墓前においてお誓いし、理事長としての挨拶とさせていただきます。

それから 2、3 日後のある支援者との会話です。

A 氏：記念式はお疲れ様でした。案内状は来なかったけど、顔を出してみました。

私：ありがとうございます。コロナが蔓延（まんえん）したこの 3 年間、行政関係にも支援者の方々にも案内状は出していません。この日は、石井記念友愛社にとって、その理念の原点に触れる日であり、その精神に 1 年に 1 度は立ち帰るため、職員たちだけで粛々と取りおこなっています。

A 氏：大事なことだね。ところで今日は、理事長挨拶の中で、気になった部分があり、聞いてみようと思いました。「縄文時代の人々のような大自然との共生と人々の助け合い（共助）の地域社会づくり」という言葉に引っかかりました。「友愛」ではいけないのかなと思ってー。

私：すみません。唐突に「縄文時代」という言葉を持ち出して。最近私の頭の中は、「縄文」という言葉に支配された状態です。

実は、先日テレビニュースを見ていてショックを受けた映像があるのです。Aさんも見られたと思いますが、あのロシアのプーチン大統領がロシアの教会でお祈りをしているシーンが出たのです。ロシアのキリストとウクライナのキリストとヨーロッパのキリストとは、本来同一人物（神）であったはずですが、分派はしたとしても、同じキリスト教徒どうして殺し合いすることに違和感を越えて怒り・嫌悪感を感じたのです。

A氏：まあ、ヨーロッパの歴史は、殺し合いの歴史だよ。人間とは何と愚かな動物なのだろうと思う。そこからどうして「縄文」に話が飛ぶのだろう。

私：「共生」とか「共助」とかいうのは、観念だけではコントロールできないというのが、私のこの頃の実感です。「グローバル化」などと言っていたのに、いつの間にか戦争になっているのです。やはり、その国の歴史や文化に裏付けされた価値観を互いに受容し合うしかない。観念だけで善の押し売りをやっている、争いになってしまう。

A氏：これからの地域社会づくりは、「共生」だとか言われるけど、その「共生」とは具体的にどうということなのかということについては、あまり深く考えられず、表面的議論に流されているよね。

私：コロナ後のことを考えると、我々日本人にとって「共生」とは何だったのかを、立ち止まってしっかり考えた方がよいのではないかと思えて来たのです。そこで浮かび上がって来たのが、縄文の人々の自然との共生・人々との共助です。随分昔の話で、資料もないと言われるかもしれませんが、46億年の地球の歴史に比べると、縄文なんてついこの前の話です。私は想像を膨らませながら、自分のDNAに問いかけるように、思いを巡らせています。

A氏：なるほど、そういうことだったのか。縄文時代の共生・共助は、きっとDNAの中に生き残っているよね。そこを互いにイメージすることで、日本人としてのアイデンティティも蘇ってくるのかもしれないね。聖徳太子が「和を以て貴しと為す」と言われたそうだけど、日本人は、「和」や「共生」の民族でありたいよね。決してもう戦争には引きずり込まれたくないね。

私：ちょうどよい機会ですので、私が今、頭の中に描いている“縄文の物語”を聞いてください。都農町の10号線沿いに石井記念尾鈴保育園が建っていますが、ここを建てる時土地を確保するのに大変お世話になった方が都農におられます。その方のお嬢さんが昔、友愛園で保育士として働いてくださったことがあります。不思議な御縁ですが、その方の息子さんの経営される歯科に、この半年ほど治療で通わせていただきました。10号線を1、2週間おきに行ったり来たりするわけですが、その過程で、「都農（つの）+都農神社（一の宮神社）+尾鈴山=縄文」という方程式が私の中にでき上がったのです。魂が呼び寄せられているような気分です。

A氏：ほう、おもしろいね。どういう意味なのだろう。ぜひ聞きたいね。

私：まず「つの」という名前の由来です。私は「との」から来ているのではないかと感じるのです。それが長い時を重ねる中で「つの」になり、「都農」という漢字が当てられるようになったのではないかと。

昔、東京神田の古本屋で「アイヌ語入門」という本を手に入れたことがあり、この本では、aso（阿蘇）は噴火口であり、tomau（妻）は沼地であり、chausu（茶臼）はとりで（砦）です。そしてtonoは殿です。

都農神社は、神武天皇が、国つくりのため大和の攻め登る際ここへ立ち寄り、「国土平安、海上平穩、武運長久」を祈念したと言われていています。その後「日向国一の宮神社」として格式も与えら

れるのですが、それはずっとずっと後のことでしょう。重要なのは、神武天皇が参拝するほどの、おごそかな神殿がここにあったということです。”神社”として位置づけられるもっと以前の話であり、おそらく縄文の時代から、ここが畏れ多い神の御座します霊地であったと思うのです。そこで「殿」と結びつきます。この霊地に、この地方を支配する縄文の豪族がいたのではないか。そして、青森の三内丸山遺跡のようなクニを作っていたのではないか。

それでは、この霊地の神とは何なのか。それが尾鈴山です。尾鈴山は昔から霊山です。高鍋藩のお殿様は、日照りが続くと山頂で雨乞いの祈禱をしました。石井十次も「ああ美なるかな尾鈴山」と称えました。

A氏：なるほど証拠はないけど、説得力のある話ですね。あのワイナリーあたりに縄文のムラが埋もれているのかもしれないね。おそらく1m2mもの火山灰の下だからなかなか見つからないのだろうね。

私：尾鈴山の何が美しいのか。石井十次はおそらく、岡山から宮崎に帰る途中、海の船の上から尾鈴山を仰ぎ見たのだと思います。1000m級の山の連なる中で、一つだけ富士山のように左右対称で端正な峰がこちらを見下しています。他の山々が自由気ままに寝そべっている感じの中で、ストイックに孤高を守っている霊山です。その姿が美しく、古代の人々は、神として崇めたのだろうと思います。おそらく、縄文時代からあの出雲のように、周辺の地域から多くの人が丸木舟で都農の港にやって来て、参拝したのだろうと思います。

A氏：なかなかおもしろい話を聞いた気もするけど、現代の我々は、どれほど尾鈴山を意識しながら生活できているのだろう。鹿児島にも上野原縄文の遺跡があり、あそこからも霧島山や桜島は一望できるけど、あれらの山々は常に噴火を繰り返し、大変だったろうと思うよ。それに比べると、尾鈴山は、母のように静かですと地域を守っている感じ。縄文の人々には人気があったかもね。

私：古代中国において戦争に負けた人々は、皆、抹殺されるべき運命を背負っていました。逃れて日本に来て、縄文の人々と混血を繰り返すことで、運命も変り、時代が「弥生」へと移っていったのでしょう。魂の奥に眠っている自然との共生・人々との共助を思い出したいと思っております。ありがとうございました。

A氏：ありがとうございました。